

「経験学習サイクル型授業研究モデル」の実践と評価

氏名 七澤 昇

1. はじめに

近年、教員の世代間バランスの問題により、文部科学省や神奈川県教育委員会において、授業研究をはじめとした校内研修を中心として学校の教育力向上を図っていくことが求められている。しかし、多忙のために授業研究に必要な時間を確保できず、研究の継続性や発展性に課題を残す中では、授業研究は形骸化しているとの指摘もされている。このような全国的傾向と、座間市立H小学校の傾向は大きく重なることが明らかになった。

先行研究では、今日教師の専門性を「反省的实践家」におく理念が浸透し、省察に焦点をおいた授業研究の分析手法が盛んに開発されてきた。一方、授業研究のスタイルは1960年代から変わっておらず、今日の授業研究の理念、分析手法に対して授業研究スタイルが追いついていない、またはあまり考えられてこなかったことが、省察したことが成果として実感しづらく、研究の発展性、継続性を阻害する一因となっていると考えられる。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、「反省的实践家」のもととなる Schon の「省察的实践論」の源泉となった Dewey の「経験学習の理論」から教師の学びを見つめ直し、Kolb が提唱した『「経験学習サイクル（具体的経験→内省的観察→抽象的概念化→能動的実験）」を授業研究のプロセスの一貫に取り入れることによって、授業研究が一連の継続性のある経験学習の働きをもつものとして機能する』ことを目的とした。

3. 課題解決の方法、評価方法

本研究の目標を達成するために、「経験学習サイクル型授業研究モデル」（図1）という授業研究スタイルを提案し、実践を行った。「1stLesson」が「具体的経験」、「研究協議」が「内省的観察」、「学年検討会」が「抽象的概念化」、「2nd Lesson」が「能動的実験」の場としてそれぞれ経験学習が働き、それが一連の継続性のあるものとして機能しているかを①授業者インタビュー ②質問紙調査 ③研究協議の発話分析（当事者型授業研究ユニット分析） ④学年検討会の発話分析 ⑤付箋シート分析で検証を行った。

4. 結果と考察

課題解決の方法を通して、H校では、「経験学習サイクル型授業研究モデル」が一連の継続性のある経験学

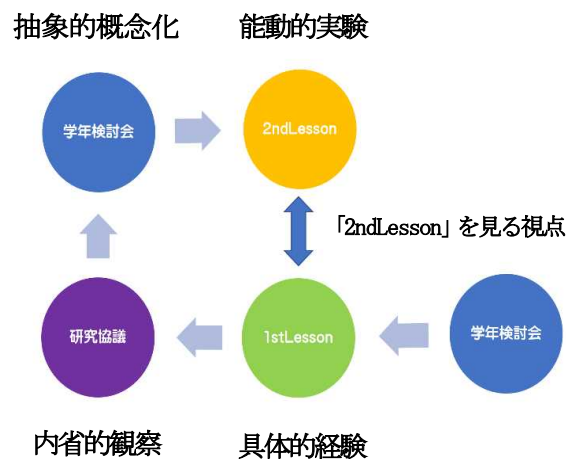


図1 「経験学習サイクル型授業研究モデル」

習の機能を有することが示唆された。

さらに、経験学習の効果を高めるものとして、①学年中心から学校全体の研究体制へと変化が見られたこと。②参観者側の授業を見取る力量の重要性に気付いたこと。③中堅教員において「学びほぐし（アンラーン）」が見られたこと。④「学年検討会」がやりやすくなったこと。⑤授業研究への当事者意識の高まりが見られ、参加意欲が喚起されたことが挙げられる。

一方で、様々な課題も明らかになった。①「経験学習サイクル型授業研究モデル」について正しい学び方の共有がさらに必要であること。②「2nd Lesson」参観者の時間的負担が懸念されること。③各ステージ間の接続と「2nd Lesson」の後をどうしていくか。④本研究の分析の視点の問題が挙げられる。

本研究はまだ道半ばであり、学校現場へ戻ってから、これらの課題と日々向き合いながら、さらに実践を前に進めていきたいと考える。

参考文献

- ・中原淳 脇本健弘 町支大祐 (2015) 「教師の学びを科学する データから見える若手の育成と熟達のモデル」 北大路書房
- ・Kolb (2018) 「最強の経験学習」 辰巳出版
- ・秋田喜代美・キャサリン (2008) 「授業の研究 教師の学習— レッスンスタディへのいざない」 明石書店
- ・千々布敏弥 (2010) 「日本の教師再生戦略」 教育出版
- ・鹿毛雅治・藤本和久・大島崇 (2016) 「当事者型授業研究の実践と評価」 教育心理学研究 2015 p.583-597